



ネコはひだまりでまるくなる

## ネコはひだまりでまるくなる

---

冬のひだまり、休日の各駅停車。昔飼っていたネコがまるくなっていたみたいに、私もごろんと横になってみたかった。昼下がりのひだまりポジションをネコと中学生の私が奪い合う。ネコが陣取ると私が添い寝する形になって、私が先に横になるとネコは私の腕の中にもそもそと入ってきた。どのみち同じような態勢なのだけれど、気持ちはまったく違う。ネコが勝ち誇った顔をするか、私が優越感たっぷりに肉球をいじるか、その差は大きい。まあ、そんなちっちゃな感情も、ぼんやりしていく意識とともにひだまりに溶けていってしまったのだけれど。

電車のシートはあちこち空いていたけれど、コートがぐしゃぐしゃになるからあまり座りたくはない。でも、ひだまりが顔を覗かせるそのスペースに、吸い寄せられるように座った。向かいの席には、派手なメイクを控えめに進める女の人と、文庫本を手にしたまもうとうとしている男の子がいた。私も何かしてみようかと思ったけれど、あいにく何もない。目を閉じてひだまりの中に身を沈めてみた。

ネコはこたつでまるくなるって歌う歌があったと思う。でも、私の記憶では、こたつよりもいつも座布団の上でまるくなっていた気がするな。特に、昼下がりの窓辺なんかは、お気に入りのポジション。いつの間にか、そこには座布団が敷かれて、ネコの特等席になっていた。私は単なるイタズラ心で、ささやかなネコの幸せであるお昼寝タイムを邪魔したものだ。最初はまるくなっているネコの背中をなでたり、耳を触ったりしていたけれど、いつの間にやらその身体をひっくり返したり、ぐるぐる回してみたり。迷惑だったんだろうなあ...もちろん、それ相応の報いは受けたけれど。しばらくしてイタズラにも飽きたので、というかネコの反応が悪くなってきたので（つまり、無視されるようになったので）、一緒に寝てみることにした。そんな日がずうっつと続いた。ひだまりの中、ふわふわした感触と光のぬくもりがとても気持ちよかったことを覚えている。

目を開くと、女の子の目は2倍も3倍も大きくなっていて、男の子はまだ舟をこいでいた。どれくらいまで大きくなるの？いつまでそこに浮かんでいるの？意味のない疑問に意味のある答えは返ってきそうもない。代わりに、私は向かいの窓の外に目をやった。窓から見える景色は、何も飛び交っていない、のんびりした冬の街。その間をするすると駆け抜ける電車も、のんびりとした音を立てる。私はひだまりの中でネコのことを思い出している。

## New shoes New world

---

歩く歩く歩く。どこまで続いているか分からない一本道を、歩く。空は快晴、風は少々。青空にふわっと浮かぶ一切れの雲は、まるで私がかぶっている帽子みたいだ。帽子、帽子。少し気になったので帽子の位置を直す。違うかなと思い、また直す。たぶん、最初とほとんど変わっていない。まあ、よくあるんだ、こういうことは。

ピアノの音が聞こえる、ギター之音も聞こえる。名前の分からない楽器の音が聞こえ、その間を語りかけるような歌がすり抜けていく。音量はいつもと同じなのに、いつも以上に大きく聞こえる気がする。周りに人がいないせいだ。時々、自転車に乗った人とすれ違う。何を急いでいるのか分からないけれど、立ちこぎで駆け抜けていった。マイペースにのろのろとこぐおじいさんもいる。ゆっくり進んでいるのに、車輪がひとつ多いんじゃないかってくらい安定している。

ちょっとした用があって、平日の昼間にバスに乗ったことがある。いくつかの停留所を過ぎたところで、やたらとたくさんのおじいさんおばあさんが乗りこんできたのを覚えている。おじいさんだかおばあさんだか判別できない人たちが、切れ目なく乗るわ乗るわ。シートを埋め尽くす老人の大群、っていうと怒られるかもしれないけれど、とても奇妙な光景だったな。バスを降りて、大きく息を吸って吐きながら、去っていくバスを見送った。あれは何だったんだろう。

おろしたてのスニーカーが地面と触れ合う感触はとても好き。身体が軽くなった気がする。真新しい靴が恥ずかしいと言う子も周りにはいるけれど、私は気にならない。むしろ、快晴で始まる朝みたいで、きれいな方が気分はいいよね。落ち葉を踏む感触も、くしゃっという音も違ってしている気がする。靴が変わると世界が変わる。ささやくような歌とギターが聞こえる。

シャカシャカという音が聞こえたかと思うと、ウィンドブレーカーを着た男の人が走って私を追い越していった。私も以前は走っていたことがある。何を思ったか、早朝ランニング。あの頃持っていたMDプレーヤーをポケットに入れて、寒い思いをしながら走った。いろんなものが始まる少し前の街をゆっくりと通り過ぎていくのは、なんだか不思議な気分だったな。自分だけがここに取り残されたような感じがして、ちょっと寂しくて、ちょっとほっとして。

帽子を取る。空に浮かんでいた雲は、もうどこにも見られない。太陽は元気にそこに浮かんでいるし、道はまだまだ続いている。風はちょっと冷たい。そろそろ髪を切ろうかなと思う。

## カサタテ

---

雨のち曇り。太陽が顔を出す気配は今のところない。それでも、冷たい雨がやんだってだけでも感謝しなきゃならないのかな。って、どこに？空に？空の都合で降ってきた雨がやんだから空にありがとうって言うのは何かおかしいんじゃないの。空も降らせたくて降らせたくてもないと思うけど。靴が濡れて足が冷たい。この腹立たしさを空に向けてぶつきたいよ。空はそんなこと知らないよって顔をすると思う。どこにぶつかりゃいいの、こういうのって。そんな顔をされたら、もう、何も言えなくなる。いろんなことがどうでもよくなる。

やたらとカラフルな傘立てがすっごい気になる。ひとつひとつは細くて一色なのだけど、それがあちこちにあって、ざっと数えて5色が見える。入り口にひっそり置かれているものだと思うけど、この店の傘立ては自分（たち）が主役だって感じで点在している。ひとつひとつがビビッドで、とてもまぶしい。ん、もうひとつ見つけた。これで6色、あとひとつで虹だ、虹がかかる。店内をうろついて見つけたい気もするけど、さすがにそれは気が引ける。頼んだカフェラテが来るまではとりあえず待とう。

公園には誰もいない。こんな天気で散歩する人はいないし、ジョギングをしている人もいない。おとなしく部屋にこもっていなさいと言っているような冷たい空気。池の周りを歩いてみる。当然ながらボートをこぐカップルもいないよね...って、誰も乗っていないボートがぼつんと漂っている。夜中に勝手に乗られて、降りた後そのままにされていたのかな。雨に濡れながら、少しずつ向きと位置を変えている。

ぐるりと見渡してみると、店のあちこちに本が並べられている。あまり広くもないけど、本棚があっても狭いという感じもしない。カフェラテをひとくち飲んでから、本を眺めに席を立つ。離れたテーブルに男の人が本を読んでいるのが見える。その人の後ろを通り過ぎて、本棚を見て回る。歩きながらさりげなく、自分の席から死角になっていた傘立ての色を確かめてみたけれど、新しい色はなかった。どこかに7色目がある、はず。

日本語、英語、あと、たぶんヨーロッパのどこかの言葉。文字がいっぱい並ぶ本、絵本のような本、写真がどーんと載っている本。どこかの国のどこかの街のガイドブックなんかもある。その言葉で書かれているので、写真でなんとなく内容を理解するしかない。それでも何を紹介したいかは分かる。晴れた空のもとで、いろんな人が笑っている。こういう写真で雨が降っていたり、不機嫌な顔をしているものってないんだろうな。当たり前だけど。手にした本をそっと元の位置に戻して、さっきとは違うルートでテーブルに戻る。7色目は、まだ見つからない。

曇りのち...やっぱり曇り。まだ太陽は見えないけども、身体はずいぶん軽くなった気がする。ほんのいつときのあたたかさ。いつまで続くか分からないけども、しばらくはもつでしょ。吐く息がっそう白く、大きくなっている。カラフルな傘立てが頭の中を駆け巡っている。メリーゴーランドのような感じで、ぐるぐると。

## スクリーン

---

いつだったか、水泳の授業の自由時間、私はよく水の中に潜っていた。潜水で泳ぐんじゃなくて、その場でプールの底まで潜って、上を見上げる。水面を下から眺めてみる。晴れている日はきらきらと揺れていて、それを見るのが好きだった。音も聞こえなくなる。上と下で世界がガラリと変わることが不思議で、楽しくて、その上泣きそうな気分だったのを覚えている。水の中だと涙はどんな風に流れるんだろうか。

冬、春、冬...そして春、たぶん。冬の悪あがきを乗せた風は、部屋の中で想像していた以上に冷たく感じる。春コートを着たあとに冬コートを着なきゃいけないっていうのは、なんだか切ない。はしゃいでいたら先生に怒られたような気分になる。バケツの水をかけられたような感じ。暖かくなってくるとパステル系の柔らかい色があちこちで見られる。冬に戻ったような寒さが続くと、また色がなくなるような気がする。街が黒とかグレーっぽい印象になる。一度咲いた花が蕾に戻るってことはないと思うけど、そんな感じがする。まあ、空気は冷たくても、太陽の光はずっと濃くなっている。

寒さから逃げるように目に入った建物の中に入る。近づいてから美術館だったことに気づいたけど、別に入るだけならいいよね。急に暖かくなったせいか、巻いていたマフラーが邪魔に感じる。コートも重い気がするし、早く外も中もちょうどいいくらいの温度になってよ。ロビーの椅子に座ってマフラーを畳んでいると、家族連れが入ってくるのが見えた。小学生くらいの子を連れてくる。これも教育だからとか感性を養うとかそんな理由で親は連れてくるんだろうな。まあ、夜な夜な飲み屋に連れていくよりは健全だとは思うけども。

その女の子と目が合う。興味あるの？女の子が立ち止まる。無表情ではないけど、笑顔というわけでもない、微妙な表情をしている。あの子くらいの年齢の子供が美術館にどういう気持ちで入るのか、私には分からない。離れた家族の方を見て、また私の方を見る。家族はロビーを抜けて展示室に入ったみたいだ。女の子は首を傾げると、家族の後を追って展示室に入っていった。どうかな？そんな声が聞こえそうな仕草だった。

そのまま出て行こうかと思ったけれど、思い直して、チケットを買って展示室へ入ってみた。大きな部屋に理解不能なものがあちこちに置かれている。どれにも興味は持てないので、ちらちら見るだけで通り過ぎる。これじゃまるで単なる散歩だ。このままこんな感じで終わるのかなと思っていたら、別の部屋を見つけた。青い光に照らされた小さな部屋。時々何かのシルエットが壁に映し出される。何だろう？人っぽかったり、動物っぽかったり、家っぽかったり。ゆらゆら揺れて、溶けるように形を変えて、消えて、また別の形で現れる。思わず手を伸ばして触れてみたくなる。届くかな。届くといいな。

## under the library

---

24時間ずっと開いている図書館があったらいいな。そこまで時間を忘れて本を読んでいたわけじゃないけど、真夜中の図書館というものを体験してみたい。ただでさえ静かな空間が、さらに静かになるというのは、なかなかイメージできない。本棚の本が動き出すなんてことはないよね...おもちゃのチャチャチャ、メトロポリタン・ミュージアム、みたいな。なつかしい。何も動かない、しんとした空気の中で、どんなことが頭に浮かぶんだろう。

24時間営業の美容室、というのは聞いたことがある。大変な時代だよね。夜に髪を切ろうなんて私は思ったこともないけど、それって一体どんな感じなんだろう？ 意外とテンションが上がるかもしれない。真夜中に感じる、あの独特の変なテンション。いろんなものを終わらせたい時にはちょうどいいかもしれないな。髪を切って、眠って朝が来たら、さあ始まるよ、って。

雪の降る夜みたいなものかな。日付が変わる頃の無口な図書館は、音もなく雪が降っているような感じかもね。窓を開けて確認するたび、雪が積もっていくのが分かる。大粒の雪が部屋の光に照らされる。どんどん積もる。どんどん積もれとつぶやく。窓を閉めてカーテンを閉めると、少し微妙な気持ちが戻ってくる。雪が積もれば積もるほど、ぽつんと取り残された感じになるけれど、同時に、もっと降ってと願っている。朝になったらまっしろでまっさらな世界に出会える。

朝の光に照らされた図書館は、いつもとは違う表情を見せてくれるのかな。ファミレスに朝までいてもいやあな気分になるだけだけど、図書館だったら違うはずだ、きっと。あと8時間とかそれくらいかな...と考えてみたところで、閉館を告げるアナウンスが流れた。まあ、図書館なんて12時間くらい開いていれば充分なんだよね、やっぱり。読んでいた本を閉じると、パタンという音が意外と大きく響いた。

## 春風が聞こえる

---

桜の下を歩くのは好き。

お花見をするのはイヤ。

桜餅は好き。

桜吹雪の中を歩くのは、ちょっと悲しい。

満開の桜が月に照らされている。ぐっと暖かくなって一気に満開になったところに、急に寒くなってちょっと嫌な気分がしたけれど、冷たい空気の中で月明かりがとてもキレイ。その光がはっとするくらいに桜をキレイに見せている。桜にも月にも吸い込まれそうな気がする。

ケータイで桜を撮ってみる。予想通りぼんやりとしか写っていない上に、別に写真に残すこともない気がしたので、即座にデータを消去した。毎年咲くんだし、夏に桜の写真を見たってどうもしないだろうしね。温暖化とか何かで桜の木もおかしくなるかもしれないけれど、だからって写真で見ても仕方ない。目で見ると「愛でる」って言うんじゃないの？

くしゅん、という声...というか音が聞こえた。周りには誰もいない。物陰に誰かがいるのかなと思ったら、誰かの家に停めてある車の下で何かが動いた。もそもそとネコが出てきて、くしゅん。ネコだってくしゃみをするんだ、車の下で。もしかして、花粉症？ だったらマスクすればいいかもね。

そういえば、わさびのついたお刺身を食べさせたら、涙をぼろっとこぼしたこともあるなあ。友達からはヒドイ！と言われたけれど、わさびがついているなんて知らなかったんだよ...言い訳か。まあ、ネコだってくしゃみもするし、泣くこともある。桜並木の下を歩くネコを見送りながら、ネコも桜がキレイだって感じるのかな？ と思ってみる。月明かり、夜桜、花粉症のネコ。これもまた、春。

## Good days, Good bye.

---

傘がない、傘がない。いきなりの天気雨だ。それほど強くもないんだけど、パラパラってほどでもない。もう濡れてもいいや、このまま歩こう。髪の毛、もうぐしゃぐしゃだな。風も強い。土の匂いがする。雨が運んできたんだ、懐かしい匂い。ここにいた頃は普通だったんだけど、コンクリートの中にいると絶対感じない匂いだ。懐かしい道を歩くと、景色が、匂いが、あの頃を思い出させてくれる。いいことも、嫌なことも、半々くらい？ 都合の悪いことは忘れちゃえ、でも、ワンセットで思い出は蘇るみたいだ。

小さい頃によくお世話になった病院は、まったく変わってないようにも、あちこちが変わっているようにも見える。外科とか内科とかを案内するプレートの文字は古さ全開で、やっぱり変わってないのかなと思う。廊下は意味もなく明るかったり、突然暗いところが出ていたり。何だか小学校みたいな感じがする。蛍光灯って寂しさ全開。その下にいるだけで何もかも嫌になる。どんよりしているのは病院だからってだけじゃなくて、蛍光灯のせいもあるんじゃないの？

来た。病院の匂いだ。入った瞬間に感じる。独特だとはよく言われるけど、その通りだと思う。なんだろう、現実感がなくなるというか、意識が遠くなるというか。身体から魂みたいなものがするすると抜けて、身体より前を漂っているイメージかな。エクト...プラズマ？ プラズム？ 気持ちよくはないけれど、かと言って気持ち悪いわけでもない。肌にぺたっとくっついてくるような匂い。

おばあちゃんが亡くなったときもそんな匂いがしていた。もう10年前だ。ここじゃない、別の病院だったけども、入った瞬間に感じていたと思う。あれは亡くなる数日前。手を消毒して、なんかビニールのカップみたいなものを着て、ビニールにくるまれたメキシコ人といった格好で病室に入った。そろそろだってことを聞かされていて、これが最後なのかなと思いつつ、意識のないおばあちゃんのそばに行った。意識がないけど生きているってどんな感じなんだろうと思いつつ、その顔をじっと見ていた。

目が開いた。寝ていただけなんじゃないかと思ったけれども、後で話したらけっこう驚かれた。ずっと意識はなくて、それ以降も戻ってなかったみたい。私が行った時も意識は戻ってなかったと思うけど、目が開いたのはどういうことなんだろう。神秘だとか奇跡だとかではないだろうし、私の勘違いってこともあるけど、私は最後に目が合ったんだと思っている。私の姿を見てくれたのかな。

雨が降ると草の匂いがする。この季節のいいところは、それ。雨は嫌だけど、匂いは嫌いじゃない。鮮やかな緑色が、匂いを引き立たせてくれる。いろんなことを思い出しながら、懐かしい坂道を下る。傘はなくても、思い出はある。昨日は今日につながっているんだ。



## クロックタイムダンス

---

楽しいよ、とっっても。そう言ったときの友達の笑顔が素敵だった。半年も前のことらしいけど、どうやらバレエを始めたみたい。知らなかったー。金曜日に電話してもつながらなかったのは、そういうことだったのね。言ってくればよかったのにな。でもまあ、とても夢中になっているみたいで、そんな状態のときにわざわざ報告することもないよね。念願かなった、って言うていたし、子供のころにできなかったことをやるんだよ、って話す彼女の目は、びっくりするくらいキラキラしていた。

知らない駅で電車を降りて、知らない道を歩く。プリントアウトした地図を片手にうろうろ、うろうろ。地図を逆さにしたり、横にしたり。ああ分かりづらい。他の人から見たら、きっと怪しいんだろうなあ。でも仕方ない。地図を見て歩くのが苦手なんだから。大目に見てよ、まったく。知らない道をなんとなく歩いてなんとなく見つけた店に入るのはなんでもないので、目的地があると途端にわけわかんなくなる。最短ルートとかってもう意味わかんない。

結局持ってきた地図よりもあちこちに立っている看板を頼りに進んだら、着いた。自分の方向感覚のひどさに改めて呆れたけれども、すぐにのどが渴いたことの方が気になって、自動販売機でジュースを買った。目についたベンチに座ってひとくち。と思いきや、飲むペースは止まらなくなって、すぐにからっぽになった。ふーっと一息つき、周りをぐるりと見渡す。大きな建物がいくつも間隔を空けて建っている。余裕のある感じ。ところ狭しなんてことはなく、ゆったりしている。広いなー。

本を選んでいるふりをしながら、ゆっくり歩いてみる。テレビで見たこの図書館が、どうしても気になって、こうして来てしまった。あまりにも遠かったらあきらめたと思うけど、意外と近かったので行こうと決めた。実際に来てみるとそんなに特別なものじゃないんだけど、ここにいるっていう事実、なんだかわくわくする。夢にまで見たってものでもないのに。テレビに映る図書館を見たとき、そこに自分がいる姿を想像した。その中に実際に飛び込んだ、って考えたらファンタジーみたいで、不思議な感じがする。ここは私の想像の中で、一步外に出ればテレビの前に座っている私に戻るのかな。うん、そうだったら、帰り道で迷うことはないんだ。一度歩いた道でも迷うときは迷うよね。

腕時計を見て時間を確認する。まだまだ時間はたっぷりある。なんとかマウスもないし、派手な乗り物もないけれど、そんなものはもともと必要ない。誰も共感してくれないけど、こういう時間の使い方が私は好きだ。時間を使っているっていうのもちょっと違うけど、流されているっていうか、身を任せているっていうか、流れるプールでぷかぷか浮いている感じかな。そういう時間が、とても心地いい。くるくる、くるくる、円を描いているみたいだ。

家族連れを駅で見かけた。誰かが遊びに来ていて、それを見送りにホームまで来たみたい。親の方はその人に何かを話して、お土産らしきものを渡している。一緒にいた女の子はなんだか落ち着かない様子だったけど、いきなり後ろに足を上げた。と思ったら今度はつま先を立てている。きっとあの子はバレエをやっているんだ。いつでもどこでも練習しているんだろうな、こんな感じで。母親にたしなめられて不機嫌そうな顔をしたけど、それでもこっそり小さくステップを刻む姿はとても楽しそう。なんだか、キラキラしている。

## Light drops

---

雨宿り。最初はぼつぼつって感じの雨が、急に強く降ってきて、なんだかドラマみたいな感じになってきた。あつという間にぐしゃぐしゃになったけど、それでも弱くなったらいいなと思って、近くの軒下に避難。こうやって雨がやむのを待つって最近ないかなあ。歩いて学校に通っていたころは、雨がひどくなってきたらこんな感じで空を眺めながら雨宿りしていた。田舎だからそんなに避ける場所はないんだけど、たまたま近くにちょうどいい軒下があるとみんなで駆け込んだ。私たちの目の前を、男の子たちはずぶ濡れのまま走っていったけれど。

今度はサスペンスみたいな感じ。雷がゴロゴロ鳴ったり、暗い部屋がぱっと明るくなるような光が目飛び込んでくる。怖くはない。安全な場所にいるからってのもあるんだけど、いつもと違う雰囲気になって、ちょっと楽しい。放課後にみんなが雷にきゃあきゃあ言っていたときも、私は違う意味で騒いでいたかもしれない。なんだかよく分からないけど、みんな私の周りに集まってきたな。お守りじゃないんだよ。泣き出した子もいて、そんな様子を見ていると、大丈夫大丈夫って手を握ってやる一方で、こうした方が男の子の受けはいいのかななんて嫌なことを考えたりもした。

おしゃれ長靴がいいなと思う。いざ買おうとするとなかなか買えなくて、それでもしばらくするとまた欲しくなって見に行くんだけど、結局また手が伸びない。街を長靴で歩いても別に变じゃないのにね。どこかで田舎ってイメージを持っているのかな。コンプレックスみたいな。田舎ではみんな普通に履いていたけど、それっておじちゃんおばちゃんだ。中学に上がったらもう長靴は卒業。早い子は小学生のうちからやめていて、なんだかそれに憧れたなあ。長靴を履かなくなったら、長靴は農作業と子供用、なんて思うようになって、それにまだ引っ張られているかもしれない。

どれだけ待ったのかは分からないけど、止む気配はない。仕方ないから、閉じた傘を開いて、えいっと雨の中に飛び出す。傘に雨粒が当たってバチバチ鳴っているのを聞くと、ちょっと怖い。雷は怖くないのに。ちょっとした浅い川を歩いているような感じになっていて、もういいやって思う。中途半端に濡れるなら、もう思い切って。いろんなところを歩いてきたスニーカー。雨にも負けず、風にも負けず、雪にも負けず。車のライトを反射して、街灯の光を反射して、水しぶきが光の粒に見える。

## 水たまり

---

新しい街は、騒がしい。でも嫌な感じの騒がしさじゃない。生活の中の騒がしさって、なんだかほっとする。電車の中でわあわあわめかれると嫌な気分になるけど、こうしてわいわい言っている商店街を歩くのは悪い気がしない。自分が通り過ぎる側だからかもしれない。賑やかな時間をするりするりと通り抜けて、ほんの少し後ろ髪を引かれる感じを覚えながら、私は違う場所に向かっている。ここに住んでいるのだから、必ず戻ってくるんだけど、それでもここに対して感じるのは通り抜ける場所なんだ。きっと私は居場所を探しているんじゃないで、ちょっと止まって休む枝を空から探している。

さっきの夕立で生まれた水たまりを跳び越える。そこに映っているものを、覗き込んで確かめたくなる。空があって、雲の欠片があって、私がいる。きっとそれくらいなんだろうけど、それだけじゃないかもしれない。水たまりの数だけ世界があるような気がする。水たまりはいろんな世界への入り口だし、そこから出てくるための出口。鏡の中の世界はなんだか戻ってこれなくなりそうで怖いけれど、水たまりに映る世界なら飛び込んでみてもいいかもしれない。空を見上げると、また雲行きが怪しくなってきた。降られる前に駅に着かなきゃ。跳び越えてきた水たまりはまた新しい雨を吸い込んで姿を変えて、新しい世界を映し出すに違いない。

この感触はずっとあの頃のまま。寝てばかりのこの子だけど、そっと（少し無理やり）抱いて、おなかをさすってみると、うん、柔らかくて、あったかい。もふっとしている。気持ちいいなあ。いいんだよ、寝ていていいんだよ。寝ていたところを起こしたのは悪かったけども。もうよたよたな感じだけど、その眼差しも出会ったころのままだよ。じっと覗き込む。うるさそうに顔を背けて目を閉じる。そうそう、寝ていればいいの。しばらくすると、いつの間にか一緒に呼吸になっていることに気づく。私も眠くなる。どっちが添い寝されているのかわかんないな。すてきな時間。すてきな感触。もう少し、このままでいたい。

友達の部屋でご飯を一緒に食べた（...食べさせてもらった）帰り道、月に照らされた雲が秋の形をしていた。思わず立ち止まってじっと眺める。また歩き始めると、浴衣を着ている人とすれ違った。そういえばさっきまで近くで花火大会をやっていたんだ。秋めく空を背景に夏の花が咲くって感じかな。夏の終わりは賑やかだね。だから次の夏もみんな待ち望むんだろうな。最近は私も夏が少し好きになってきた気がする。いろんな人の影響かもしれないけど、息を潜めて秋が来るのを待っているより、夏と一緒に駆け抜けた方が楽しいかな。それでも秋の気配を感じてわくわくするのは変わらない。

